

日本語統語論研究のハンガリー語における日本語教育現場への応用 —直接受身文からの考察—

エトヴェシュ・ロラード大学
小野久禎

0. はじめに

本発表では、ハンガリー語母語話者に対する日本語教育において、日本語統語論研究での成果をより直接的に活かせることはできないかを考察するが、そのために、現代ハンガリー語にはない受動態をハンガリー語母語話者に教えるために日本語統語論研究での成果が役に立つかに注目する。

具体的には、まずタンコー (Tankó) の 2010 年のハンガリー語母語話者に対する英語受身文の教授に関する報告をし、この教授法が日本語の受動態をハンガリー語母語話者に教えるときに役に立つかを議論する。この議論では、まず、生成文法における日本語受身文の構造分析を紹介し、日本語の教科書 (『新日本語の基礎』、『みんなの日本語』、『げんき』) での受動態の扱われ方を比較する。その後、日英翻訳、英日翻訳における直接受身文の翻訳上の問題を紹介し、タンコー (2010) を再度取り上げ、タンコーのような受動態の教授法を日本語の直接受身文の教授でも応用できるかを考察する。

以上の議論を通して、ハンガリー語母語話者に対し日本語の直接受身文を教えるにあたり、ハンガリー語から英語、そして、英語から日本語というステップから日本語統語論研究での成果を活かすことは難しく、ハンガリー語母語話者に日本語統語論研究の成果を効果的に日本語の受身文の教授に活用するには、ハンガリー語と日本語を直接対照しなければならないと結論する。

1. ハンガリー母語話者に対する英語の受動態の教授法

現代ハンガリー語において受動態はない注 i。しかし、ハンガリー語はかなり自由に語順を交換することができる。そして、文のトピックは語頭に来る。タンコー (2010) は、ハンガリー語の文において目的格の名詞がトピックポジションに来た場合、英語では受身文になる。それを以下のような例文を提示し、指摘している。

例 1 : A házat felépítették = The house has been built.

その家を (彼らが) 建てた

例 2 : A levelet Botond itta. = The letter has been written by Botond.

その手紙を ボトンドが 書いた

タンコー (2010) は、実際にハンガリー語で目的語がトピックポジションにくる文を英訳では受身文にするという方法を教わったグループと教わっていないグループに分け、この教授法が効果的かを調査した。そして、前者のグループの方が後者のグループより英語の受身文をより多く、また、正確に使うようになったと報告している。

しかし、ここには一つの疑問が残る。英語とハンガリー語間では効果的であるかもしれないが、全く同じ方法がハンガリー語・日本語間でも通用するかということである。

2. 生成文法における日本語受身文の構造

Hoshi (1999) は日本語の直接受身文は二直接受身文とニヨッテ直接受身文注 ii に分けられることを指摘している。そして、両者には以下のような構造上の違いがあると分析している。

表 1

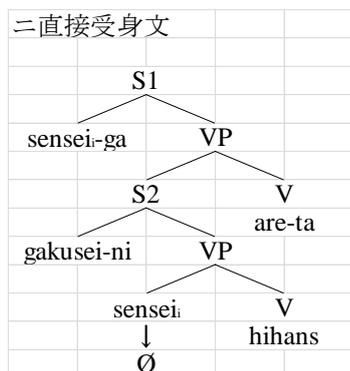
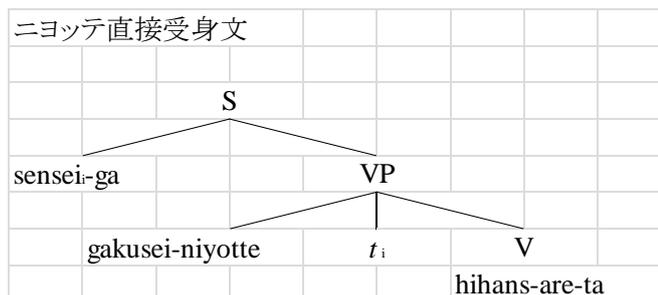


表 2



共に Hoshi (1999) より

Hoshi (1999) では特に二直接受身文では主語（ここでは「先生」）が θ 位置にあるが、ニヨッテ直接受身文の主語は θ 位置にない注 iii。

筆者は主語が θ 位置にあるかないかだけでなく、構造の複雑さにも注目した。二つの受身文の構造を比較すると二直接受身文は 4 層で構成され、ニヨッテ直接受身文は 2 層で構成されている。つまり、二直接受身文の方がニヨッテ直接受身文より複雑であるということが出来る。

3. 日本語の教科書における受身文の導入

ここでは、現在、日本語教育の現場においてよく用いられている『みんなの日本語』とその基になった『新日本語の基礎』と『げんき』の比較をする。

『みんなの日本語』は 1998 年初版出版、『げんき』は 1999 年と出版年の違いはわずか 1 年しかないが、『みんなの日本語』は、1990 年に出版された『新日本語の基礎』注 iv の構成を踏襲している。そのため、文型の扱われ方も『新日本語の基礎』と同じである。現在では『みんなの日本語』の方が『新日本語の基礎』より多く用いられているが、構成が同じであることから『新日本語の基礎』と『げんき』では受身文をどのように扱っているかに焦点を当てる。

まず、『新日本語の基礎』であるが、受動態は全 50 課中の第 37 課で扱われている。わずか 1 課の中で二直接受身文、間接受身文、行為者が記述されていない受身文（構造はニヨッテ直接受身文と同じ）がそれぞれ別々に紹介されているが、構造が二直接受身文より単純なニヨッテ受身文に関する記述はない。なお、文型の順番も前文で述べた通り、二直接受身文、間接受身文、行為者が記述されていない受身文の順である。

『げんき』では全 23 課中第 21 課で扱われているが、受身文は主に被害を表す場合に用いられるとし、直接受身文と間接受身文の違いを説明せず、同一のものとして扱っている。そして、被害を表さない受身文注^vは、脚注に説明があるのみである。なお、『新日本語の基礎』と違い第 23 課で使役受身文が扱われている。

以上のようなのであるが、『新日本語の基礎』に比べ、『げんき』の方が日本語統語論研究の成果を反映している。まず、二直接受身文と間接受身文であるが、両者の構造は、下の表のとおり、同じである。このことから、初級段階においては、共に被害を表すのであれば、直接受身文、間接受身文の区別なく受身文として導入した方がわかりやすいと考えられる。

表 1

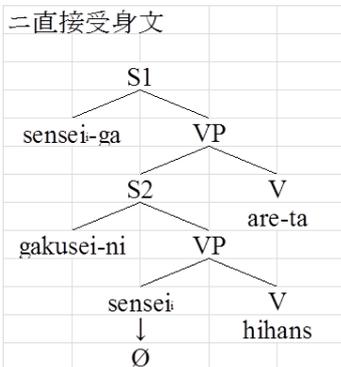
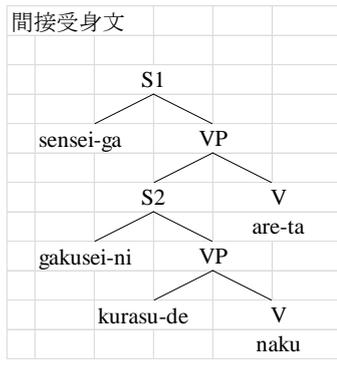


表 3



共に Hoshi (1999) より

加えて、釘貫 (2008) は、日本語の伝統的受身構文では話者/動作主の被害を表示するのが主流であると主張している。日本語の受身文が話者/動作主の被害を表示するのが主流であるのならば、日本語教授法でもまず、被害を表す受身文を導入し、後でその他の受身文を導入した方が合理的であると考えられる。

4. 日英翻訳と英日翻訳における受動態の問題

ここでは、日本語から英語への日英翻訳と英語から日本語への英日翻訳における受動態の問題を比較する。単純に考えれば、日本語か英語どちらかが受動態をより多く使い、どちらかに翻訳するときに必要なならば能動態の文を受動態に変換またはその逆にすればいいはずである。しかし、実際には日英翻訳、英日翻訳共に受動態が必要以上に用いられ、不自然な文が作られているとの指摘がある。では、なぜこのようなことが起こるのであろうか。

この原因を議論する前に、まず、日本語の直接受身文と英語の受身文の構造上の違いについて述べたい。英語の受身文の構造は以下のとおりである。

表 4 英語の受身文

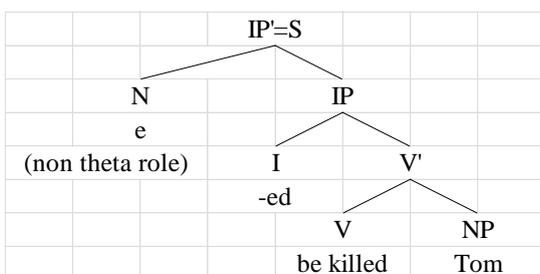
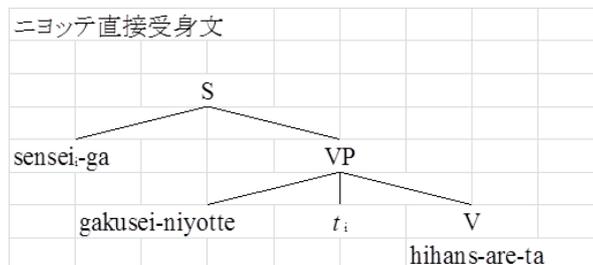


表 2



上記のように英語の受身文はニヨッテ直接受身文と同じ構造で、主語は非 θ 位置にある。

では、ここで、木村（2013）が指摘している日本語母語話者が英作文をする時に見られる受身文の多用の問題について論じる。

木村はこの問題を議論するにあたり、英語の受動態には以下の 7 つの特徴があることを指摘している。このリストから、英語では行為者を表す **by+名詞** の句を使うのにかなりの制限があることもわかる。

1. 軍などの組織や、法律、規則などで行為を受けざるを得ない場合で、誰が行ったのか、はっきりしない場合や、はっきりさせたくない場合。
2. 事件などで行為者がわからない場合。
3. 行為を受ける者の方が行為をする人よりも重要な場合。時には **by~** で行為者を示すこともある。
4. 多くの人によってなされていて、特定の人によってされた行為ではない場合。
5. 行為者は重要ではなく、注目すべきは行為を受けた後の結果や状態の方である場合。
6. 先行文から後続の文の内容が予測可能であり、先行文の内容の中心的部分に関連する要素をその連関性を引き継ぐために先行文に最も近い主語の位置に置く場合。
7. 主語に来るものが「行為をされる」と言うことを強調したい場合。**by~** による行為者を示す表現がある。

一方、日本語の受動態には日本語の受動態のルールが適応される。例えば、日本語は英語と違い主語を省略できる言語であり、それは、しばしばなされる。そのため、例えば、「ソーシャルネットワークで友達を容易に作れる」という文を作ることができる。日本語母語話者は、英訳するときにも日本語同様に受動態を用い、**Friends can be made easily on social networks.** と訳しやすいと木村（2013）は指摘している注 vi。

また、木村（2013）は、日本語では無生物がアクションを起こすことができないため、主語が無生物の場合、日本語母語話者は自動詞文を使わず、受身文を使う傾向があることに注目している。例えば、**Ooi nuclear power plant stopped generating electricity.** と訳すべきところを **Ooi nuclear power plant was stopped generation electricity.** と訳してしまうのである。

このような受動態の多用による誤用が起こる原因として木村（2013）は中学・高校での受動態の学習で、受動態の文の形だけを重視し、能動態と受動態の文の書き換え練習を機械的にすることによって能動態と受動態が等しい意味で交換可能であるような誤解を学習者に生じさせていることにあると指摘している。そして、このような機械的な受動態と能動態の変換を統語論でも否定されており、能動態、受動態、それぞれ独立したものとして扱われている。

では、英語から日本語に翻訳がされる場合、どのような問題があるだろうか。阿辺川、植田、影浦（2009）は、和訳するとき以下 3 点を注意する必要があると指摘している。

1. 自動詞文にする

例：The bill was thrown out after a brief discussion in the Diet.

→この法案は、国会で簡単な討議があった後、廃案になった。

2. 主題提示の助詞「ハ」を活用し、英文の主語をそのままに能動態として訳す

例: His letters were written by his secretary. → 彼の手紙は、秘書が書いていた。

3. 主語と動作主を入れかえる

例: He was listened to with enthusiasm by the audience.

→ 聴衆は 熱心に彼の言葉に耳を傾けた。

*by などの前置詞により動作主が明示されているときによく使われる。

面白いことに木村（2013）は英訳では日本語の受身文を英語では自動詞文に変えた方がいいときがあると指摘しており、これは、阿辺川、植田、影浦（2009）の主張の逆である。いずれにせよ阿辺川、植田、影浦（2009）では英語の受身文を和訳する際、日本語では受動態の使用を避け、上記のように訳した方がいいことを指摘している。

5. ハンガリー母語話者に対する日本語直接受身文の教授法に関する問題

では、日本語統語論研究における成果はハンガリー語母語話者に対する日本語直接受身文の教授にどのように役立つであろうか。

まず、ハンガリー語と日本語の特徴を比較する。タンコー（2010）ではハンガリー語の目的語がトピックポジションにあるとき、英語では受動態に直すといいと主張している。しかし、日本語もハンガリー語同様にかなり自由に語順を変えることができ、ハンガリー語同様、目的語を文頭に置くこともできる。また、タンコーの主張する英訳法ではハンガリー語の文において主語となるべき代名詞 *ők*（彼ら）が省略されている。日本語も主語の省略が可能であるが、ハンガリー語は動詞の語尾が人称を表すので主語が省略できるのに対し、日本語はコンテクストによって主語の省略ができる。そのため、以下のような文の場合、受動態を用いると翻訳がおかしくなる。

ハ: Barátokat a közösségi hálón könnyen szerezhettek.

日: (彼らは) 友達をソーシャルネットワークで作った。

? 友達はソーシャルネットワークで作られた。

また、日本語の受動態は「に」または「によって」を用い、英語の *by* 以上に行為者を表すことができる。そのために、タンコー（2010）の主張するように三人称複数の主語省略の文のみが日本語では受動態になるとは限らない。また、英語では受動態でも日本語では自動詞文を用いた方がいい場合があること、日本語では無生物が主語になりづらいこともタンコー（2010）の翻訳法をハンガリー語の和訳に応用しにくい原因となっている。加えて、日本語では助詞「は」が文のトピックを表すという特徴もある。

以上のことから、日本語統語論研究の成果をハンガリーの日本語教育現場に生かすには解決しなければならない問題が多い。まずは、英語を介さない日本語とハンガリー語の受動態の対照研究を発展させなければならないと考えられる。

6. 結論

本発表では、ハンガリー語母語話者に対する日本語教育において、日本語統語論研究での成果をより直接的に活かすことはできないかを考察したが、そのために、現代ハンガリー語にはない受動態をハンガリー語母語話者に教えるために日本語統語論研究での成果が役に立つかに注目した。

ハンガリー語母語話者に対する日本語の直接受身文を教えるにあたり、ハンガリー語から英語、そして、英語から日本語というステップから日本語統語論研究での成果を活かすことは難しいことがわかった。ハンガリー語母語話者に日本語統語論研究の成果を効果的に日本語の受身文の教授に活用するには、ハンガリー語と日本語を直接対照しなければならないと結論する。

参考文献・資料

阿辺川武、植田禎子、影浦峽（2009）「英日翻訳における受動態の訳し方の分析」『言語処理学会 15 回発表論文集』 pp777-780, 言語処理学会

海外技術者研修協会編（1993）『新日本語の基礎 II』スリーエーネットワーク

木村郁子（2013）「なぜ日本人学生の英作文に受動態表現が多いのか？—学生の英作文からの考察と指導についての提案」『言語文化論叢』第 7 号, pp127-139, 千葉大学言語教育センター

釘貫亨（2008）「日本語ヴォイスの歴史的成立と展開について」『第 8 回国際研究集会報告書』名古屋大学大学院文学研究科

http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/result/pdf/01_%E9%87%98%E8%B2%AB_No.8.pdf

坂野永理他（1999）『げんき II』The Japan Times

町田健（2000）『生成文法がわかる本』研究者出版

Hoshi, Hirtoto (1999) Passives in 'the Handbook of Japanese Linguistics', Wiley-Blackwell 191-235

Tankó, Enikő (2010) Facing Difficulties in the Acquisition of the English Passive by L1 Speakers of Hungarian, *Acta Universitatis Sapientiae, Philologica*, 2,2 312-325

注 i 以前は-atik/etik という接尾辞を用いて動詞を受動態にすることができた。

注 ii Hoshi (1999) は *nyotte passive* と言っているが、ニ、ニヨッテ共に直接受身文であることを強調するために、ここでは「ニヨッテ直接受身文」という語を用いている。

注 iii ニ直接受身文は目的格から主格に移ったのではない（それを表すために \emptyset で表されている）。

注 iv 受動態は 1993 年に出版された『新日本語の基礎 II』の中で扱われている。

注 v 例：『げんき』は 1999 年に出版された

注 vi We can make friends easily on social networks とした方が英語では自然である。